



2022年1月7日

報道関係各社 御中

近代日本の衛生行政の礎を築いた人物・長与専齋

感染症に関する衛生行政に注目が集まる今、見直されるべき業績とは 危機下の私権制限のあり方問う

【本件ポイント】

- ▼近代日本の衛生行政の基礎は、いかに築かれたのか。
- ▼西洋の「衛生」の概念をモデルにした長与専齋の構想が、衛生行政に与えた影響を検証。
- ▼新型コロナウイルスの猛威により感染症に関する衛生行政に注目が集まる今、見直されるべき長与専齋の業績とは。
- ▼新型コロナウイルス対策では、ロックダウンなど「憲法が保障する私権制限の範囲」が論点となったが、明治時代のコレラ流行当時、長与はどのような立場をとったのか。

【概要】

- ◎新型コロナウイルス感染症の流行により、改めて注目を集めた「保健所」。その元となる仕組みを明治時代に築いた長与専齋について、本学法学部の小島和貴教授が研究をしています。
- ◎専門家会議の設置やロックダウンの回避など、新型コロナ禍で日本政府の取った対応の根元は、衛生行政の確立に奮闘した長与の功績が深く反映されています。
- ◎この度、本学の新たな企画としてスタートした「教員著書に関する、著者インタビュー企画」の第1回に、小島和貴法学部教授の『長与専齋と内務省の衛生行政』を取り上げています。
- ◎本件に関する関係者へのインタビューや取材等が可能です。

【詳細】

新型コロナウイルス感染症の流行によって、改めて「衛生行政」という観点が注目を集めました。各国が様々な対応を講じる中、日本政府も保健所を中心とした対応や専門家会議の設置、ロックダウンではなく国民への外出の自粛要請など、様々な対策を講じています。

これら、日本政府の対応を「衛生行政」という観点で紐解いていくと、ある人物にたどり着きます。それが、初代内務省衛生局（現在の厚生労働省）局長を務めた、長与（ながよ）専齋（せんさい）（1838-1902）です。

長与は、長崎の医家に生まれ、緒方洪庵が大坂で主宰した適塾で学び、福沢諭吉の跡を継いで塾頭になった俊才でした。1871年に岩倉遣外使節団に随員として、岩倉具視らとともに西洋諸国を視察します。そこで政府には、住民の健康増進を図る役割があり、責任を持って感染症対策に取り組んでいることを知ります。

帰国後、長与は西洋諸国で学んだ「医学の知識に裏打ちされた衛生政策を、住民へ届けるための仕組み」を構築します。現在は、厚生労働省があり、府県や政令指定都市では保健所を通じて住民への衛生政策が進められていますが、こうし



長与 専齋

明治5年ベルリンにおいて撮影（35歳）
【松香遺稿】より

た衛生行政の基礎を築いたのが長与でした。明治時代にはコレラが流行していたこともあり、現在の新型コロナ対策で注目されている専門家会議のように、医学的な知見を政策に反映させることにも取り組みました。

桃山学院大学（大阪府和泉市、学長：牧野丹奈子、2021年5月1日時点：学生数6,493人）では、総合研究所所長の小島和貴教授（法学部）が、長与専齋について研究しており、長与に関する著書を出版しています。

このたび、本学では新たに本学教員が自らの著書について、その魅力や研究背景などを語る企画「著者インタビュー」を本学総合研究所 Web サイトにてスタートしました。

その第1回では小島教授が、著書『長与専齋と内務省の衛生行政』をもとに、明治期日本の衛生行政黎明期における、初代内務省衛生局長・長与専齋の構想と行動について検証、インタビューを通じてわかりやすく紹介しています。

詳細は、著者インタビュー記事本編をぜひご覧ください。

【著者インタビュー（本学総合研究所 Web サイト）】

<https://www.andrew.ac.jp/soken/research/interview/index.html>



長与について解説する小島和貴教授（法学部）



著者インタビュー
『長与専齋と内務省の衛生行政』